

Topics

各紙掲載記事より 95年6月～95年9月

■6/14 (報知) 女子サッカーが国体の正式種目に
国体のサッカーはレベル、年齢に応じて成年1部、2部、青年(高校)に分かれているが、成年2部の廃止に伴い、女子サッカーを新たに組むことになった。これまでも正式種目にする動きがあったが、先の世界選手権で来年のアトランタ五輪出場を決めてのベスト8入りが大きく影響したようだ。

■6/29 (スポニチ) 「女子アマ相撲連盟」来年発足へ
日本相撲連盟専務理事の田中英寿氏が、女子アマ相撲の新組織構想を明らかにした。特徴は着衣と土俵。レオタードの上まわし付きの相撲パンツをはくスタイル。土俵には、土ではなくてマットを使う。アマ相撲は、2008年の五輪競技入りを目標としている。女子連盟の発足でさらに「普及度」をアピールしたい考えだ。

■7/1 (読売) 「ここから上は男だけ」15年後に悔しさ晴らす
6月24日から4日間、東京で「エベレスト・ウイメンズ・サミット」が開催された。エベレストに初めて女性が登頂した1975年から20年。世界各国から集まった女性の登頂者がこの間の「女性の変化」を語りあった。最高峰の女たちの“本音”は、はからずも、アジア、欧米の女性の社会進出の差を反映した内容のものとなった。

■7/4 (朝日) 伊達日本女子初の8強入り 3日、テニスのウィンブルドン選手権第7日、松岡修造と伊達公子がそろって準々決勝に進出という快挙を演じた。伊達の8強入りは日本勢初。

■7/26 (読売) 「水原勇氣」「ハーラー」誕生に高野連のカベ 男子選手に混じって練習に励む女子野球部員の姿が各地で目立つ。だが日本高校野球連盟の大会参加者資格規定第4条に「その学校に在学する男子生徒で…」と明記され、彼女たちは公式戦に出場できない。高野連では、力の差が歴然で女子は危険と「安全性」をその理由にあげているが。

■8/5 (読売) 新時代の組織委、過半数が女性職員
1年後に迫ったアトランタ夏季五輪は「機会均等の国」米国を鮮明に映し出している。組織委関係の職員は、3月の集計で1035人。この内訳は男性489人に対し、女性が546人。指導の立場の377人をみても、女性が140人(37.1%)と多い。「五輪のなかで社会のモデルを作りたい」と上級政策担当顧問のシャーリー・フランクリン(50)は胸を張る。

■8/24 (産経) 女子中・高生の体操着に異変 授業で使う女子の体操着を「ブルマー」から短パン型の「ハーフパンツ」に替える中学、高校が増えている。かつては女性解放の象徴だったブルマーも「体の線が見えて恥ずかしい」「性的な対象にされる」等、現代っ子には欠点の方が目立つらしい。

■9/20 (読売) ハラハラドキドキ初登板 東京六大学野球史上初の女性投手、明治大学のジョディ・ハーラー投手(23)が19日、対東大戦で先発登板した。しかし打者11人計50球で無念の降板。

■9/27 (朝日=共同) IOCも男女平等推進へ
国際オリンピック委員会(IOC)の理事会は26日、各国内オリンピック委員会が2000年末までに議決機関に少なくとも女性を1割含んでいなければならない、とする新規定を作る方針を決定した。